

◇ 国 語

国 3-1～国 3-18 まで 18 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

もし、人間の意識を機械に移植できるとしたら、あなたはそれを選択するだろうか。死の ア に面していたとしたらどうだろう。たった一度の、儂く美しい命もわからなくはないが、私は期待と好奇心に抗えそうにない。機械に移植された私は、何を呼吸し、何を聴き、何を見るのだろうか。肉体をもっていた頃の遠い記憶に思いを馳せることはあるのだろうか。

未来のどこかの時点において、意識の移植が確立し、機械の中で第二の人生を送ることが可能になるのはほぼ間違いないと私は考えている。

しかし現時点で、意識の移植は、我々人類にとってはるか彼方の夢だ。意識を宿す機械の目処はついていない。そもそも、意識の原理がまるでわかっていない。

意識の科学は、あ 普遍的な道筋をもたず、多くの立場が混然一体となつて入り乱れているのが実状だ。そもそも、意識の何が問題であり、どこから手をつけるべきなのか、科学者や哲学者の間で意見の一致を見ていない。

ただ、近年、意識を扱う一部の研究者の間で、一つの取り組みが芽生えつつあることは確かだ。この取り組みを通して眺めると、ぼんやりとしていた意識の科学のリンクが鮮明になり、その解決へと向けて新たな道筋が見えてくる。本書ではこの取り組みに焦点をあてたい。

その取り組みとは、意識の科学に、新たな自然則を導入するというものだ。自然則とは、その言葉からわかる通り「自然のルール」、つまり自然界のコンカンを成す法則である。光の速さが常に一定であるとする「光速度不変の法則」のように、科学の基礎に位置づけられるものだ。

アルベルト・アインシュタイン（一八七九～一九五五）の相対性理論から導かれる数々の奇妙な現象、たとえば物体が光の速さに達すると時間が完全に止まってしまうといったことが「光速度不変の法則」を起源としていたように、意識という不思議な現象にも、何らかの普遍的な起源が存在する い イ が高い。そして、仮にそれがあるのだとしたら、他の自然則がそうであるように、生命誕生の い 昔、ビッグバンの直後から存在していたはずだ。

ただ、意識の自然則と言われても、なかなかイメージがわかないだろう。二つほど仮説をあげるなら、哲学者デイヴィッド・チャーマーズ（一九六六）はあらゆる情報が意識を生むと主張しており、神経科学者のジュリオ・トノーニは統合された特殊な状態にある情報のみが意識を生むと唱えている。それらの意味と **ウ** については、じっくりと本文で説明していきたい。

意識の自然則を導入する取り組みが目指すのは、意識の科学を、科学のあるべき姿へとシヨウカさせることだ。科学のあるべき姿とは、自然則にもとづく仮説の提案と、実験による仮説検証を繰り返すことにより、対象の本質へと迫っていくものだ。それは、幾千年も前から、哲学と科学の間をさまよっていた意識を、ついに科学のまな板にのせることにもつながる。

紹介が遅れたが、筆者の専門は脳神経科学で、いつの頃か意識の問題にとりつかれた。今では、哲学者ジョン・サール（一九三二）が言うところの「脳を研究して意識を扱わないのは、胃を研究して消化を扱わないようなもの」を地でいっている。日々、意識にまつわるマウスの脳計測実験を行いながら、意識の神経メカニズムに想いを馳せ、頭を悩ませている。

そんな筆者が確信をもつて言えることが一つある。それは、意識ほど手つかずで、深遠な問題は科学全般を見渡しても **エ** を見ないということだ。

ちなみに、本書の第一の目的は、読者にこの奥深い意識の問題を知ってもらおうことである。宇宙の深淵まで行かなくとも、**ジンチ**の限りを尽くして取り組むべき問題が私たちの頭の中にある。そして第二の目的は、一つの提案を通して、この意識の問題に **ウ** を開くことである。

以下は本書の構成だ。

第1章では、本書で扱う意識を定義する。ここでの意識とは、「見える」「聴こえる」などの感覚意識体験、いわゆる「クオリア」だ。紙面を利用して、そこに図形があるのに「視覚クオリア」がない、逆に、図形がないのに「視覚クオリア」がある、といった多様な目の錯覚を実際に体験してもらいながら、その意味を解説していききたい。

ただ、**感覚意識体験が意識そのものであることを説明しても、なかなか納得してもらえないことが多い。見えたり、聴こえた**

りすることが、私たちにとってあまりにも当たり前であるからだ。それでも、え 感覚意識体験を扱うのには理由がある。意識にまつわる実験が、ほとんどと言ってよいほどこの感覚意識体験を対象としてきたからだ。

一般的に意識というとき、自らを自らと認識する「自己言及的な意識」など、より複雑なものを思い浮かべる人が多い。しかし、これらについて科学的に検討することは困難だ。それらが存在し、また興味深いのは確かだが、実験的に明かされていることがほぼ皆無のため、すべての議論が砂上の楼閣^⑤となってしまう。

だが、安心してほしい。感覚意識体験は、もともと原始的な意識の形態である一方、意識の難しさの本質をすべて内包している。これが解き明かされたとき、より複雑な意識を含め、意識全般の解決への糸口が見えてくるはずだ。

続いて第2章と第3章では、意識の科学のこれまでの歩みを先人たちのドラマを交えながら概説する。第4章以降の要となる「意識の自然則」のオ を実感するためには、意識の何が問題であるか、そして何が未知の部分として残っているかを正しく把握しておかなければならない。そのための準備段階だ。

第4章の前半では、いよいよ意識の真の問題、そして難しさへと迫っていく。意識には、意識ならではの難しさがある。DNAの二重らせん構造を発見し、その後、意識の科学の黎明期に大きく貢献したフランシス・クリック（一九一六～二〇〇四）の言葉、「あなたはニューロンの塊にすぎない」の意味をぜひ噛み締めてほしい。読者のみなさんも、意識が脳に宿ることの真の不思議さを実感できた暁には、天地がひっくり返ることとき衝撃を味わうはずだ。

本書では、この衝撃を少しでも多くの読者に味わってもらうために、お なく脳の仕組みについて説明するよう心がけている。分子レベルのナノの過程から、脳の機能単位としてのニューロン、複数のニューロンによる神経回路網、そして、数億程度のニューロンからなる脳の一部分、そして脳全体へと、それぞれのスケールの仕組み、そして異なるスケール間のつながりについて解説していく。少々うるさく感じるかもしれないが、肝心なのは、仕組みそのものを理解してもらうことよりも、脳のどこにもブラックボックス（未知の仕組み）が隠されていないことを実感してもらうことだ。ブラックボックスがないのに意識が宿る、これこそが衝撃なのだ。

第4章の後半では、意識の自然則の必要性とそれを検証していくうえでの課題について見ていきたい。意識への挑戦を科学と

して確立するための鍵を握る重要部分だ。

実を言えば、脳を用いての自然則の検証には限界がある。たとえば、情報が意識を生むとする先の仮説を検証するには、脳から情報だけを抽出しなければならない。しかし、ナマモノである脳の宿命からそれは許されない。無理に抽出しようとするれば、今度は脳が死んでしまう。その対案として、機械に意識を宿そうとする試みがあるが、今度は、機械の意識を検証する肝心のテストが存在しない。

本書の第二の目的である、意識の問題に う を開くための提案とは、機械の意識をテストするための新たな手法を指す。その先に見据えるのは、機械への意識の移植だ。ぜひ、最後まで読んでいただき、読者のシンパ^Fンを仰ぎたい。

そして第5章では、提案する機械の意識のテストを思考実験（頭の中で想像するだけの実験）として用い、意識の自然則に思いを馳せる。はたして、テストに合格し得る神経メカニズムとはいかなるものだろうか。情報が意識であるとするこれまでの提案の中に答えがあるのかを検討していきたい。

終章では、ここまでの議論を踏まえ、技術的な展望を示そうと思う。

冒頭、人間の意識を機械に移植することは、はるか彼方の夢と述べたが、その夢が実現する日は意外にも早く来るのではないかと筆者は考えている。かつて小学校の卒業アルバムに、「誰も行ったことのないところに行きたい」との夢を記した。当時は、子どもながらに、火星あたりを思い浮かべていたのだろうが、今は思わぬところに行けるのではないかと密かに期待している。

近年の意識研究の取り組みに、風車小屋に立ち向かうドン・キホーテの姿を見るか、それとも、巨人へと立ち向かう勇者の姿を見るか。本書を読み終えたとき、少しでも後者が見えたなら本望である。

脳科学の幼少期が終わり、大きな転換点を迎えている時代に立ち会えたことに筆者は興奮を覚えている。その一端でも伝えられれば、これに勝る喜びはない。

（渡辺正峰『脳の意識 機械の意識』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A リンカク

- ①市のガイカク団体で働く
- ②カクシキの高い行事
- ③事件のカクシンに迫る
- ④メイカクな回答を探す
- ⑤事業のカクダイを図る

1

B コンカン

- ①最もカンヨウな問題
- ②カンガンのいたり
- ③カンセン道路に近い
- ④道路がカンボツする
- ⑤カンゼン懲悪の物語

2

C ショウカ

- ①ショウバツを記入する
- ②古典文学をショウヤクする
- ③身元をショウカイする
- ④事態の悪化にショウリヨする
- ⑤課長にショウキユウする

3

D ジンチ

- ①ハクジンを交える
- ②ジンボウが厚い
- ③戦いのフジンを敷く
- ④ジンダイな被害
- ⑤ジンソクに解決する

4

E シンパン

- ①オンシンが途絶える
- ②文化のシンコウを図る
- ③適法性をシンサする
- ④外国をシンリヤクする
- ⑤シンロウで倒れる

5

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ・オ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

ア	①道	②傍	③淵	④横	⑤裏	6
イ	①安定性	②可能性	③具体性	④現代性	⑤連動性	7
ウ	①革新性	②合理性	③積極性	④多面性	⑤保守性	8
エ	①外	②答	③他	④類	⑤本	9
オ	①人間性	②必要性	③必然性	④保守性	⑤普遍性	10

問三

空欄

あ

い

う

え

お

に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中

からそれぞれ一つずつ選べ。

あ

①かつて

②いまや

③かたや

④いまだ

⑤いつそ

11

い

①かなた

②はるか

③かくて

④ほんの

⑤そんな

12

う

①とば口

②登山口

③突破口

④非常口

⑤出入口

13

え

①あえて

②わざと

③すぐに

④ここで

⑤まさに

14

お

①過半数

②過不足

③過保護

④過干渉

⑤過渡期

15

問四 傍線部 (a)・(b)・(c) の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。

(a) 混然一体

- ① 性質の異なるものが混じり合うこと
- ② 一緒になって移動すること
- ③ 同じ場所でひとつに固まること
- ④ ばらばらに広がること

16

(b) まな板にのせる

- ① 素材に加工を加えること
- ② 同じものを重ねること
- ③ 取り上げて話題にすること
- ④ 必要なものだけ残すこと

17

(c) 砂上の楼閣

- ① 目に見える結果のこと
- ② 地に足がついた議論のこと
- ③ 結果が出ないこと
- ④ 目に見えない建物のこと

18

問五 傍線部 (一) 「近年、意識を扱う一部の研究者の間で、一つの取り組みが芽生えつつあることは確かだ。」と筆者が説明する根拠は何か。その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

19

- ① 脳を用いての自然界の法則にはまるで限界がなく、いつでも、誰でも簡単に実験を行うことが可能だから。
- ② 人間の意識を機械に移植することは容易なことで、肉体をもっていなくても、見たり、聞いたり、話したりすることが間もなく実現するから。
- ③ 意識というぼんやりしたものに自然界のルールを導入することで、仮説の提案や実験による仮説の検証に取り組む研究が始まっているから。
- ④ 感覚意識体験は原始的な意識の形態であり、人間には誰でも自らを自らと認識する能力が備わっているから。

問六 傍線部（二）「感覚意識体験が意識そのものであることを説明しても、なかなか納得してもらえないことが多い。」と筆者が考えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

20

- ①意識の原理がまるでわかっていないので、科学者や哲学者でさえ理解できないことを一般の人に説明することが難しいから。
- ②意識に関する研究が遅れていて、脳科学はまだ幼少期にあり、ブラックボックスが隠されたままだから。
- ③意識の自然則の必要性とそれを検証していくうえでの課題がまだまだ多く、説明に必要な論拠が明らかにされていないから。
- ④目の錯覚を実際に体験してもらっても、「見える」「聴こえる」ということが当たり前すぎるから。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

元且に猫に死なれた。享年十八。猫の墓掘りが新世紀の初仕事だった。わが家の隣は寺の墓地で、庭を掘ると古い五輪塔の石が出る。その石の一つを猫の墓石にした。翌日になったら、その石が移動していた。老齢の猫だったし、最後はヨレヨレで、死ぬときには人目につかないところに行こうとしたらしいが、途中で力尽きて倒れた。だから墓から出るほどの気力はなかったはずである。なぜ墓石が動いたか、いまだにわからない。もともと人間用の墓石だったから、本来の持ち主が猫嫌いだったのかもしれない。それなら墓石のほうに猫を嫌って逃げたのである。

わが家の裏山を越えると、駆け込み寺の東慶寺である。隆慶一郎の小説の舞台にもなっている。ここに小林秀雄の墓がある。これは鎌倉時代の五輪塔を利用してある。本人が石屋で気に入ったのを買ったらしい。他人の墓石を使ったこういう先例があるから、猫に使ってみたが、墓石にはそれが気に入らなかつたのかもしれない。

墓が動くというのは、考えてみれば、大きな異変の ア である。とはいえ猫の墓だから、なにか起こるにしても、たかが猫程度の異変であろう。いまは置き直した石が無事に収まっている。

猫がいないから、妙に元気が出ない。十八年いると、ほとんどビヒンである。それがないと、生活のリズムが狂う。冬は私の仕事の椅子に座り込んで、はなはだ邪魔だった。あるときから、しかし、ぱったり私の部屋に来なくなつた。寝る場所をときどき変えるのである。最後は一家全員が集まる居間で寝ていた。娘か客がいるときは、その寝床に潜る。枕に頭をのせて、寝床の中央に寝るから、客が遠慮して脇で寝る。近寄ると、両足で相手を押しやろうとする。それがうるさいから、私の寝床には入れなかつた。

一度子どもを産んだことがある。ミルクをやると、子どもたちが駆けつける。それを押しのけて、母親の自分がミルクを飲む。どうしようもない現代風の母親だったが、死ぬまでミルクが好きだった。最後はものが食べられなくなって、ミルクをわずかに飲んだ。最後はほとんど病気で、下の始末も悪くなつた。私のいないときは、お手伝いさんが老人介護ですね、参考になりますといいつつ、

面倒をみてくれた。ガ^ンコな猫で、こちらの思うようには絶対にならない。若い頃からそうだった。なにを望んでいるか、こちらが察して、先回りしなければならぬ。

子どもは娘の布団のなかで産んだ。仕方がないから、そのそばに段ボールの箱を置いて、中に子どもを入れておいた。数日したら、自分で二階から階下の押入れまで、五匹の子どもをいつの間にか運んでいた。いちおう親の役目は心得ていたらしい。

若い頃は、庭のサクラからセミを捕ってきた。得意になってくわえてくるが、雄のセミはギヤアギヤ鳴くから、うるさくてたまらない。そのうるさいのが自慢だったのであろう。意外によく狩をする猫だった。はじめは市中に住んでいたから、そこでは

イ

セミとトカゲを捕っていた。それしかいなかったからである。その後、いまの山の中に引越した。猫は家につくとい

うから、元の家に帰ってしまわないかと心配したが、引越した当日だけ、押入れの布団にいつの間にか潜り込んで、隠れて寝ていた。そこなら臭いが元の家とまったく同じだから、安心できたのであろう。次の日にはもう外に出て、頼みもしないのに、ネズミを捕まえてきた。野生のマウスで、こんな珍しいものを捕ってはいけなさと説教した。そのせいか、ネズミ一家が遠くに逃げたか、二度とネズミは捕らなかつた。

そのかわり鳥とモグラとへびを捕るようになった。鳥が好きで、捕まえるとかならず食べてしまう。だから羽しか残らなかつた。哺乳類は食べない。リスもモグラも捕ったが、遊ぶだけである。モグラは丈夫だから、猫に遊ばれてもビクともしない。朝になると、客間をモグラが走り回っていた。

こうして考えていると、いままで飼った猫のことを、しだいに想い出す。裏の寺の屋根に登ったきり、下りられなくなった猫もいた。夜帰ってこないで心配していたら、翌日の朝、お宅の猫じゃないですか、お寺の屋根の上で鳴いてますよ、と知らせてくれた人がいた。下から呼んだら、屋根の上から私の腕に転がり落ちてきた。それでも飼い主はわかっていたらしい。鳩を追いかけて屋根に登ったものの、怖くて下りられなくなったのであろう。そういうところは人間とあまり違わない。

特定の動物を殺した記憶は、いつまでも強く残っている。死なれるのは嫌だが、殺すのも嫌である。そうかといって、実験では動物を多く殺す。これはじつは二人称と三人称の違いである。飼っている動物は二人称である。自分で世話をしていると、殺せなくなる。日本語ではこれを **ウ** という。だから私は実験に野生動物を使うことが多かった。これは赤の他人、つまり三人称だからである。人間だって、知り合いの死の方が、赤の他人の死よりこたえる。きわめて親しい人は、結局いつまでも死なない。それをあきらめるために、さまざまな死後の儀式がある。

助手になりたての頃に、学生実習用にモルモットを飼った。一週間、色素を注射しつづけると、結合組織のなかの**食細胞**が青く染まる。それを学生に**ケンビ鏡**で観察させる。ところが一週間自分で世話していたら、殺せなくなった。だから青いモルモットを死ぬまで飼っていた記憶がある。

私は動物愛護を説いたことはない。それどころか、この歳になっても虫を殺している。中年にさしかかる頃、もう虫を殺すのも、動物を殺すのもやめよう。そう思った時期もある。 **エ** がついたらしい。ところがその後の世の中を見ていたら、木は切り放題、魚は捕り放題、食物は余って捨てるようになった。地面にはコンクリートを敷き、モグラは住むところもない。そうなったらヤケクソで、私が殺す虫なんて、人間に滅ぼされる虫のほんの一部にもならないと思うようになった。だからいまは**元の木阿弥である**。

ブータンではカモハエも殺さない。しかしウシもヤクも食べる。人間とはそういうもので、その辺の釣り合いが面白い。現代社会では子どもが残酷な行為をするので話題になっているが、大人のすることを見ていたら **オ** であろう。樹齢百年の木を平気で切り倒す。それで命の尊さを教えろという。子猫を一匹殺したって、一生覚えてる。樹木だって生きものだから、それを切る気持は、本当は猫を殺すのと同じに違いない。だから古木を切るときの伝統的な儀式があった。いまではそれも、ほとんど行われなく

なってしまうた。^五そういう伝統には意味があったのだが、それをなくしたのも大人である。

推理小説を読んで、殺しはいけないというのも、妙なものである。じゃあ、なんでそんなものを読むのか。本当に殺すより、ヴァーチュアルに殺す。人間の住む世界はどうせ脳の中、ヴァーチュアルなだから、最初からヴァーチュアルで済ませておけばいいのである。戦争だって、そうなればいい。戦争ゲームで済ませるようになればいいのである。それを進歩という。

(養老孟司『考える読書』による)

問一 傍線部A・B・Cと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ビ_レヒン

① ビ_レシ麗句を連ねる

② 薬をジ_レウビ_レする

21

③ サン_レビ_レな光景を見る

④ 議論のク_レチ_レビ_レを切る

⑤ ビ_レテイ骨を骨折する

B ガ_レン_レコ

① 勝利をキ_レガ_レン_レする

② ゴ_レガ_レン_レ工事を行う

22

③ ガ_レン_レキ_レョウな精神力

④ ガ_レン_レシ_レョウに乗り上げる

⑤ イ_レチ_レガ_レン_レとなつて戦う

C ケ_レン_レビ_レ鏡

① ケ_レン_レゴ_レな要塞

② 意気ケ_レン_レコウ

23

③ 漢字をケ_レン_レサクする

④ 容疑者をリ_レツ_レケ_レン_レする

⑤ 特徴がケ_レン_レチ_レョである

問二 空欄

ア

イ

ウ

エ

オ

からそれぞれ一つずつ選べ。 に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中

ア

① 代名詞

② 異常性

③ 違和感

④ 義務感

⑤ 普遍性

24

問三 傍線部(一)「いちおう親の役目は心得ていたらしい」と筆者が言う理由は何か。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

イ ①いかにも ②ともかく ③不意に ④突然 ⑤もっぱら 25

ウ ①興がのる ②悪寒がする ③血が濃い ④朱に交わる ⑤情がうつる 26

エ ①仏心 ②正義感 ③憑物 ④弁護 ⑤情熱 27

オ ①浪費 ②反抗 ③得意 ④当然 ⑤安心 28

① どうしようもない現代風の母親だったが、死ぬまでミルクが好きで、最後はものが食べられなくなって、ミルクをわずかに飲んだから。 29

② 子どもたちを押しつけて自分がミルクを飲むような現代風の母親だったが、自分で二階から階下の押入れまで子どもを運ぶような一面を持っていたから。

③ 子どもを娘の布団のなかで産んでおいて、そのそばの段ボールの箱の中に子どもを入れて数日間放っておくような母猫だったから。

④ 一家全員が集まる居間で寝て、客が近寄ると両足で相手を押しやろうとするので、それがうるさくてたまらなかつたから。

⑤ 若い頃からこちらの思うようには絶対にならず、なにを望んでいるか、こちらが察して先回りしなければならぬような猫だったから。

問四 傍線部(二)「これはじつは二人称と三人称の違いである」という言い方で筆者が言いたかったことは何か。最も適当なもの、次の①～⑤の中から一つ選べ。

30

- ① 特定の動物に死なれるのも殺すのも嫌であるが、実験では動物を多く殺さなければいけないということ。
- ② 飼っている動物に「あなた」と呼びかけるのは二人称であり、赤の他人と見なせば三人称になるということ。
- ③ 自分で世話をしている動物は殺せなくなるから、実験では野生動物を使うことが多かったということ。
- ④ 人間にとって知り合いの死は赤の他人の死よりこたえるが、赤の他人は野生動物と一緒に見なせばよいということ。
- ⑤ 特定の動物を殺した記憶はいつまでも強く残ってしまうため、野生動物を殺すのは嫌であるということ。

問五 傍線部(三)「きわめて親しい人は、結局いつまでも死なない」とはどのような意味か。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

31

- ① 二人称で語られるような人は死ぬときも延命治療が施されて長生きするという意味。
- ② 家族など身近な人間に関する記憶はいつまでも強く残っているという意味。
- ③ 親しい知り合いには健康な人間が多いのでいつまでも死にそうにないという意味。
- ④ 死後の儀式というものは親しい人の死をあきらめるためにあるのだという意味。
- ⑤ 自分で世話をしている動物は簡単には殺せなくなってしまうという意味。

問六 傍線部(四)「いまは元の木阿弥である」とはどういう状況を指しているのか。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

32

- ①今の世の中を見ていたら、木は切り放題、魚は捕り放題、食物は余って捨てるようになったから、昔のような自然は二度と戻ってこないと思うようになったということ。
- ②これまで動物愛護を説いたこともなかったが、かつて中年にさしかかる頃にはもう虫を殺すのも動物を殺すのもやめようと思った時期もあったということ。
- ③かつてのブータンではカモハエも殺さなかったにもかかわらず、今はもうヤケクソでウシもヤクも食べるようになったということ。
- ④かつてもう虫を殺すのも動物を殺すのもやめようと思ったのだが、今は自分が殺す虫なんて人間に滅ぼされる虫のほんの一部にもならないと思うようになったということ。
- ⑤現代社会は地面にコンクリートを敷き、モグラは住むところもないのだから、もっと動物愛護を説くべきであったと思うようになったということ。

問七 傍線部(五)「そういう伝統には意味があった」と言うが、伝統の持つ意味とはどのようなものか。適当なものを、次の①～

⑦の中から二つ選べ。

33

34

- ①今では古木を切るときの伝統的な儀式もほとんど行われなくなってしまったが、それをなくしたのは大人であるということ伝えていくことが伝統儀式の持つ意味である。
- ②ブータンではカモハエも殺さないが、ウシもヤクも食べるのであり、その辺の釣り合いを面白くすることが伝統的な儀式の持つ意味である。
- ③人間の住む世界というのはどうせヴァーチャルなのだから、本当に殺すのではなくヴァーチャルに殺すことを教えるのが伝統的儀式の意味である。
- ④子どもたちの残酷な行為を戒めるためにも、大人が手本になって命の尊さを教えるのが伝統的な儀式の持つ意味である。
- ⑤大人のことを見てまねをする子どもたちに、現代社会は残酷なのだということを教えていくことが伝統的な儀式の持つ意味である。
- ⑥人は子猫を一匹殺しても一生覚えていくものであり、樹木も生きものであるのだから、それを切る際に命に対する敬虔さを抱かせるのが伝統儀式の持つ意味である。
- ⑦人は最後はほとんど病気になるって死んでいくのであり、老人介護を学ぶつもりで参考のために動物の面倒をみるというのも伝統的な儀式の持つ意味である。